

月影



第77号

令和五年十一月一日発行
浄土宗西山禅林寺派
常林院



どうにもならぬ
そのまま
みんな
浄土の華になる



口を開けば
愚痴が出る

相手を妬み
自己を省みず

どうしようもない私が
どうしようもないまま

阿弥陀さまに
救われていく

開宗八五〇年

法然上人の生涯

【十四】

四国へ配流



還俗

可愛がっていた女官の松虫と鈴虫が出家したことを知った後鳥羽上皇は激怒し、法然上人は還俗げんぞく（僧侶から俗人に戻されること）させられ、藤井元彦の名で土佐（後に讃岐に変更）へ配流となりました。

弟子たちは法然上人の身を案じ、

「表向きは念仏を停止し

て、内々で布教されてはどうでしょうか」

と提案する者もいました。が、法然上人は、

「かねてから地方へ行き、念仏の教えを広めたいと思っていた。今回、その望みが叶えられたのだ」と答えられ、念仏の教えを広める姿勢を変えられたことはありませんでした。

兼実との別れ



九条兼実は、師である

法然上人を救えなかった悲しみにくれています。

兼実は法然上人を法性寺に招き、別れを惜しむ

ように最後の語らいをしました。

配流の行き先が土佐から、九条家の所領である讃岐に変更になったのは、この九条兼実の配慮によるものと考えられています。

いよいよ別れの時、法然上人は九条兼実に次の御歌を詠まれました。

露の身は

ここかしこにて

きえぬとも

こころはおなじ

はなのうてなぞ

※はなのうてな蓮台

私たちは露のようにいつかは消えてしま

いますが、必ずお浄土の蓮の上で再会しましょう。

九条兼実は、この別れの翌月、五十九歳でこの世を去ります。

四国へ

三月十六日。たくさん弟子たちに見送られ、法然上人は都を発ちました。

京の鳥羽から船で淀川を下り、瀬戸内海の沿岸をたどりながら、海路で四国へ向かいました。（続く）



仏事と

作法

納骨

納骨とは、遺骨をお墓へ納めることです。

人は自然から生まれ、最後は再び自然へ帰っていきます。納骨すると、墓地の底が土なので、自然へ帰ることになります。

納骨法要

納骨する際、まずは納骨法要を勤めます。お寺の本堂、あるいは自宅で

読経し遺骨を供養します。その後、墓地へ移動し納骨します。

さらし

遺骨は骨壺の中に入っていますが、骨壺のままではお墓に納めません。

納骨堂などでは骨壺のまま預かる所もありますが、骨壺のままだと自然へ帰ることができません。一般の墓地では、遺骨を骨壺から「さらし」に移し納骨します。



袋状に縫った「さらし」

「さらし」は何年かすると朽ちていきます。墓地の底は土なので、遺骨は土に帰っていくのです。

納骨のあいさつ

遺骨を納めた後は、墓地の蓋ふたを閉じ、墓前で読経します。

その際に、両隣、向こう三軒のお墓にも「これからお世話になります。よろしくお願いします」といって思いを込めてお線香を供えます。

納骨前に確認

お墓の側面に戒名を刻む場合は、納骨日に間に合うように、前もって石

材店に連絡をして打ち合わせする必要があります。また、石材店が墓石を刻むためには、お墓のお性根しょうね抜き（魂抜き）が必要なので、お寺にも事前に打ち合わせが必要で

す。

納骨する時、火葬証明書はお寺に渡します。火葬証明書がないと、法律上、納骨することができません。火葬証明書は骨壺と一緒に骨壺が入っている箱に入っています。

※納骨の手順や作法は、宗派や地域によって違いがあります。

仏教歳時記



座布団の薄きをならべ十夜かな

三輪由子



十夜会は、十日十夜にわたって阿弥陀如来の法恩に感謝する法要のこと。現在は短縮して勤めることが多い。室町時代、真如堂で平貞国が行った十日十夜の念仏行に由来している。真如堂では、現在も十一月五日から十五日までの十日間勤められています。当寺では十一月十四日に勤めています。

雑記抄 〳雅楽

以前、雅楽を習っていたことがありました▼雅楽は約千二百年前に日本に伝わり、笙、篳篥、龍笛の三管と、太鼓や琵琶、琴などで演奏する世界最古のオーケストラと呼ばれています▼その昔、東大寺の大仏開眼供養の時も雅楽が壮大に演奏されたように、仏教とも深い縁があります。現在も寺院で大きな法要の時は、雅楽が演奏されます▼オーケストラとの大きな違いは指揮者がいないということです。演奏を始めるときは、吹き始めの人が皆の顔を見て「始めま

すよ」と会釈して吹き始めます。演奏中は、お互いの音を聴き合い、音の大きさや速さに気をつけながら奏でます。皆が自分の音だけを聞いていては良い演奏はできないのです▼雅楽は、お互い相手のことをよく聴き、思いやることの大切さを教えてくれます▼ところで、事前に「打ち合わせ」をするという言葉は、雅楽が由来の言葉です。演奏前に打楽器が集まり、曲の速さなどを「打って」「合わせて」決めていたことが語源だそうです。他にも雅楽が語源の言葉はたくさんあるようです。